

「花ざかりの森」の成立背景： 学習院における「貴族的なるもの」の位相

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード: 作成者: 杉山, 欣也, Sugiyama, Kinya メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000169

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「花ざかりの森」の成立背景

——学習院における「貴族的なるもの」の位相——

杉山欣也

1

三島由紀夫の文壇デビュー作「花ざかりの森」（昭一六・九）
（一）は日本浪漫派の影響下にある作品と目されて久しい。

それは、後年の三島による自己言及と、掲載誌「文芸文化」に
違和感なく収まっていることを根拠としている。果たしてそ
れは根拠といえるほど客観性の高いものだろうか。まずはこの
点について考えたい。

第一に、三島の自己言及を根拠とする危うさについて。周知
のように、従来の三島研究はその死に至る三島の軌跡の意義つ
けに腐心してきた。その際は三島事件という謎の解釈が最終目
標とされるため、はるか以前の事象にも死の原因を探ろうとす
る週及的な問いの立て方がなされがちである。こうした研究状
況において、三島の自作解説や自己言及はその死の謎を解き明
かす鍵としてのバイアスをもって読まれる。このバイアスに基
づく解釈は死という一事象によつて生という多様性を規定する
行為であり、本来ならば色彩豊かなはずの作品世界を単一色に
塗りつぶす危険をはらむ。また、その際に三島の自己言及が金

科玉条のごとく根拠とされることは、三島自身が死に際して用
意した解釈を踏襲することにほかならない。三島の死は政治的
な抗議に基づく意志的な行動であったが、それは自らの死後
における人心の変革を望んでのものであったともいわれる。な
らば、週及的な問いに耽溺することは、三島の思惑に沿つてそ
の行動を補完・補強する行為であり、翻つては三島の死をその
時々都合よく利用することでもある。

次に、「花ざかりの森」の「文芸文化」における親和性と、
日本浪漫派に結びつけられる点について。「文芸文化」は昭和
十三年七月、国文学者の池田勉・栗山理一・清水文雄・蓮田善
明によつて創刊された。創刊意図について、池田「創刊の辞」
は「古典の権威」の「復活」と「黎明」を目標とし、その態度
は「伝統をして自ら権威をもつて語らしめ、我らはそれへの信
頼を告白し、以て古典精神の指導に聴く」と語る。実証主義的
な国文学への批判を含むこの意図は、日本浪漫派、とくに保田
與重郎の主張に近いとされる。保田の場合、文学の内部的退廃
を指弾しつつも、自らの立場を「旧時代の没落を飾る最後のも
のとして十分なデカダンス」（「文明開化の論理」と位置づけ、

イロニーとして没落への情熱を語るという「政治への屈折した態度」を示しているのに対し、国文学研究誌であった「文芸文化」にそうした政治性はうかがわれず、「審美的で、感性の強さとゆたかさを伝統解釈にむけようとする一種高踏的な雰囲気」が濃厚であるという差異が指摘されているにもせよ、前提において重なり合う。保田をはじめ「コギト」「日本浪漫派」執筆者が多く寄稿していることもあって、古くから「文芸文化」は広義の日本浪漫派と定義づけられてきた。この点に異議はない。

一方、「文芸文化」と「花ざかりの森」との関係については従来の定説に再考を促したい点がある。「花ざかりの森」は学習院中等科教官・清水文雄の推薦によって「文芸文化」に掲載された。校内寮の舎監となり、中等科五年生であった三島の訪問を受けた清水が「花ざかりの森」の原稿に感銘を受け、「文芸文化」の編集会議に持ち込んだエピソードは三島没後に清水によって紹介され、非常に有名である。奥野健男氏が「花ざかりの森」は、恩師清水文雄の国文学的美意識、評価を目標として書かれた小説」であり、「見事に合格して」「文芸文化」に掲載されたと論じたように、「花ざかりの森」が「文芸文化」を介して日本浪漫派と結びつく背景には三島没後における証言の受容が関わっている。しかし、没後における近親者の証言は非常に主観的であり、証言そのもののバイアスを検証しなければ妥当性を持たない。

はたして「花ざかりの森」は「文芸文化」を意識して構想・執筆されたのだろうか。「花ざかりの森」以前の作品を見せる際に清水に宛てた昭和十六年九月十七日付書簡「これらの作品

をおみせするについて」で三島は、清水が「花ざかりの森」と同列の作品を期待していることへの「心配」や恐れ、「気恥かし」さを記している。それは「花ざかりの森」以前の創作について三島が清水の指導を受けていないことを意味する。現にこのとき清水に示した小説は「文芸文化」や日本浪漫派とはまったく無縁な内容であり、「文芸文化」にも掲載されなかった。そもそもこの書簡には作家としての自己紹介に近い叙述もある。それまで学習院文芸部の「学習院輔仁会雑誌」以外に発表媒体をもたなかった三島が、突然「文芸文化」や清水文雄を念頭に「花ざかりの森」を執筆したとは考えにくい。三島が清水の評価を当てにしていた可能性を完全に否定できないにしても、三島にはもつと身近な「学習院輔仁会雑誌」というメディアがあり、少なくとも擱筆時にはそちらを念頭に置いたと考える方が自然である。ならば「学習院輔仁会雑誌」と「花ざかりの森」の関係を考える必要があるだろう。

「花ざかりの森」の末尾には「昭和十六年初夏」と擱筆時期が記されている。学習院文芸部の先輩・東文彦に宛てた同年七月二十日付書簡に「小説出来上りました故早速お送り申し上げます。」とあり、完成はその直前である。八月五日付東宛書簡には、

——扱てこの間の「花ざかりの森」は、清水文雄先生「中略」だの、松尾先生だのがやつてゐられる雑誌にのせていたことになつたので、輔仁会雑誌には詩でも出さうかとおもつてをります。輔仁会雑誌にあの小説をのせるとすると、「その三」をどうしても不満のまま出さなければな

らないので実際どうしようかと迷つてゐたところでした。

とある。「花ざかりの森」を清水に見せたおりに添えたらしい昭和十六年七月二十八日付の清水宛書簡でも「これは秋の輔仁会雑誌に出す心積ををります」とある。

八月九日付書簡では、不満の残る「その三」を「前二十一枚だつたのが三十四枚になり十三枚増えました。すこしはゆつたりしたやうです。」と東に報告しており、「文芸文化」掲載が決まつて「その三」に加筆し、上下に分かれた現行の形に改稿したことがわかる。東に送つた原「花ざかりの森」は六十枚程度であるが、同年七月十日付けの東あて書簡には「輔仁会雑誌の締め切りと枚数のこと」として「締切は九月十日で枚数は二十五枚。これは表むきでホントは締切はそのまゝながら、創作は枚数、五、六十枚ぐらゐまで結構です。」とあり、「学習院輔仁会雑誌」を念頭に「花ざかりの森」を執筆したという仮説には紙幅の面からも妥当性がある。「花ざかりの森」が当初「学習院輔仁会雑誌」一六七号（昭一六・一一）への発表を意図していたことと、「文芸文化」への掲載が突然の決定であつたことはまづがいない。

一方、連載が始まつた「文芸文化」九月号「後記」で蓮田明が「われわれ自身の年少者」「悠久な日本の歴史の謂し子」「我々より年は遙に少いがすでに成熟したもの」と「花ざかりの森」の作者を絶賛したことは、両者の結びつきの強さを示すものとして重視されてきた。だが、ここで重視されるべきは蓮田が「縁」という単語で読者に強調する共時性ではないだらう

か。蓮田は「此の作者を知つてこの一篇を載せることになつたのはほんの偶然であつた。併し全く我々の中から生れたものであることを直ぐ覺つた。」とも記している。そこに年少の作者に対する配慮があつたことは否定できないにしても、「偶然」という語の暗示する共時性の内実についても考えておかねばならない。その点を、筆者は学習院との関連から考えてみたい。先走つていえば「花ざかりの森」のモチーフには当時の学習院の状況が影を落としており、それが「文芸文化」や日本浪漫派の理念に通じるものであつたため「文芸文化」と「縁」を結ぶに至つたと筆者は考える。この同時代的共振を検証することは、三島の自己言及や没後証言の枠から「花ざかりの森」を解放し、同時代的な《場》に定位することとなるだらう。

2

ここでは「花ざかりの森」が日本浪漫派や「文芸文化」の中で違和感を与えない点を考える。昭和十六年七月二十四日付け東あて書簡で、三島は「花ざかりの森」の意図を次のように説明している。

扱て、拙作御覽のことと存じますが「中略」表題の「花ざかりの森」といふのは、ギイ・シャルル・クロスの詩からとつたもので、内部的な超自然な「憧れ」といふものゝ象徴のつもりです。一の巻、即ち「その一」は現代、「その二」は準古代（中世）、「その三」は古代と近代の三部に

分たれ、主人公の系図（憧れの系図）に基づいてみます。
「中略」この一篇が「貴族的なるもの」への復古と、それの「あり方」を示すものであることは「その一」の後段の主張でおわかりだらうと存じます。

引用中の「憧れの系図」なり「貴族的なるもの」への復古の主張なりは、発表、未発表を問わず「花ざかりの森」以前の作品には見られない。文学上の親友であった東にさえ唐突な印象を与えるために解説が必要だったのだろう。その点は前述の清水宛書簡草稿と逆の配慮である。「その一」の後段の内容や「系図」という呼称からみて、その「主題」「主張」は、語り手である「わたし」の語りや「武家と公家の祖先」の設定に表現されていると考えられる。

そこで「その一」後段にみる語り手の時代認識を検討する。「わたし」は、「固い人となり」の母がその性格ゆえに「貴族の瞳」を失い、「憧れ」の系図から疎外されたと述べる。母は自らの血統に誇りをもたないばかりか、血統を誇ることも自体を「虚栄心」として自らに戒めた女性であり、この姿勢を「わたし」は「アメリカナイズされた典型」「プウルジョア」と批判する。そして母は、教育方針として「わたし」を「わたしの家のおおどかな紋章」と重なる父から遠ざけたのである。

「わたし」は「その二」冒頭で、その血統を川にたとえる。ここで「わたし」は母に「矜持」が欠けていたことを「祖母と母において、川は地下をながれた」と表現する。その川が「滔々とした大川にならないでなにならう」と「憧れ」の対象とし

て「わたし」に意識される。これは「わたし」がこれ以後の記述の中で自らの祖先に「憧れ」の情を見出すことよって、母の戒めを破り「武家と公家の祖先」との一体感を求める感情を肯定する根拠となるという、循環論法ぎみの二重構造となっている。

この二重構造を考える際には、同時期の保田與重郎の言説、たとえば「我が最近の文学的立場」（昭一五・三）「コギト」を念頭に置くことわかりやすい。

血統とは、我々に於て国家であり民族である、少くとも文学的には芭蕉が貫道するものは一なり、といふ表現で云つたそれである。「中略」私らの考へたことは、ある血統的な系譜の樹立といふことにあつた。それは将来のいつかの日になれば、ある高級な批評の準備行動だつたと云はれるかもしれないと思ふ。「中略」文化と文明をもつた生活は一体どこにあるかを考へる必要があらう。恐らく代々の日本の貴族とその世襲は新アメリカを多分にもつやうな文化生活を恥かしい限りと思ふだらうと思ふ。

両者を読み比べたとき、「花ざかりの森」に「国家」なり「民族」なりといった概念は保田ほど声高ではないが、母を「アメリカナイズされた典型」と呼んで批判する「わたし」に日本という「国家」「民族」が意識されていることは確かである。それが「武家と公家の祖先」をもち、祖先との一体感を求める「わたし」の設定に反映しているならば、母への容赦ない批判

は「日本の貴族とその世襲」がアメリカナイズされた「文化生活」を「恥ずかしい限りと思ふだらう」と論じ、「血統的な系譜の樹立」を指す保田と符合する。いわば保田の文学史叙述の擬人化として「花ざかりの森」の「系譜的主题」はある。

保田は「戴冠詩人の御一人者」(昭二三・九 東京堂「緒言」でも「現代の文芸批評家の当面の任務は、今世界的時期を経験せねばならない日本の、その「日本」の体系を文芸によつて闡明し、より高き「日本」のために、その「日本」の血統を文芸史によつて系譜づけることである」と述べ、日本武尊を源流とする戴冠詩人の「血統的な系譜」として文学史を論じている。「我が最近の文学的立場」が収められた「文学の立場」(昭一五・一二 古今書院)を三島が参照したか不明だが、清水の回想には「戴冠詩人の御一人者」を三島に貸した旨が記されているので、「花ざかりの森」の「その二」から「その三」(下)に至る「系譜的主题」の構想に際して、意識の片隅に保田が存在したとしても不思議ではない。

こう考えると、「文芸文化」においたとき「花ざかりの森」が違和感なく収まってみえる理由のひとつに、保田の主張が「花ざかりの森」に影を落としていることを指摘しうる。東宛書簡をみると、「花ざかりの森」発表直後から保田に対する言及がふえることを確認できる。九月二十五日付け書簡に「近ごろ文壇には浪漫派が大分進出してきたのではありますまいか。保田與重郎などはその大将でせう。浪漫派といふもの、解説や主張をよみますと、まだなにか首肯できぬものもあるもの、なか／＼立派な主張だと思ひます。いわゆる万葉精神といふも

のでせうか。」とあり、十一月十日付け書簡でも「花ざかりの森」について「抽象的観念的な言葉に詩語のやうに取扱ひたく思いましたので、そんな言葉に詩味を感じたのは、リルケや保田與重郎の影響だつたらしいことは、蔽ふべくもありません。」とあるのがその例である。「花ざかりの森」と保田の言説との関係が深いことはここからも裏付けられる。つまり、「花ざかりの森」はそのモチーフに保田をはじめとする日本浪漫派の言説の影響があるため、同じ影響を受ける「文芸文化」と共振を起したのである。必ずしも清水や「文芸文化」の評価を当てにしたわけではない。しかし、なぜ三島は従来の方法を捨てて「花ざかりの森」を書いたのだろうか。

3

先述の七月二十四日付け東宛書簡で、三島はこの「武家と公家の祖先」の系譜を「憧れの系譜」と呼ぶ。この「憧れ」について、同書簡は「内部的な超自然的な」ものとしている。祖母や母によつて祖先との共生を阻まれた結果として、その系譜に対して「わたし」は「憧れ」の姿勢をとらざるをえないわけだが、なぜこの「憧れ」は「わたし」にとつて「内部的な超自然的な」ものとして設定されなければならなかったのか。その内発性こそが、恐らく代々の日本の貴族とその世襲は新アメリカを多分にもつやうな文化生活を恥かしい限りと思ふだらう。」と間接的な話法で語る「我が最近の文学的立場」と、「わたし」において、——ああそれが滔々とした大川にならないでなにに

ならう」と語る「わたし」との差異である。実は、「花ざかりの森」における保田からのモチーフの借用と一人称の語りによる内発性の強調には、学習院という環境が影響している。「学習院輔仁会雑誌」の誌面からこの状況を検証し、「貴族的なるもの」の主張が学習院においてどのような意味をもっていたのか考察したい。それは、なぜ三島が従来の方法を変えて、「貴族的なるもの」を主張したのかという疑問に対する回答となるだろう。

学習院は皇族・華族の子弟を教育する機関として設立された。そのため、皇室の藩屏・国民の儀表の役割を担う華族の教育機関としての機能は、時代とともに濃淡こそ異なれ、常に意識されていた。三島、東ともに華族ではないが、初等科以来学習院に在学したふたりが書簡で「貴族的なるもの」についてやりとりすることは不自然ではない。一方、日中戦争の拡大から太平洋開戦に向かう時代にあつて、「学習院輔仁会雑誌」は「貴族」意識に関する議論の高まりを見せる。

三島が「花ざかりの森」発表をもうろんだ「学習院輔仁会雑誌」は文芸部の機関誌ではあつたが、創作だけを掲載する文芸誌ではなく、中等科・高等科の校友会である輔仁会の機関誌としての性格を有していた。そのため、輔仁会の会務委員や所属各部の活動報告にも多くのページを削いでいる。「会務報告」欄や各部の報告欄には、輔仁会大会、各部主催の展覧会や演奏会、弁論大会あるいは作家・軍人・官僚などによる講演会など、さまざまな文化活動の様子が記されている。ここでは弁論部の活動に注目してみたい。

弁論部は明治二十二年の輔仁会設立当初より演説部として存在し、三島の在学時には年間に複数回の弁論大会を開いていた。その内容は「弁論部報告欄」に詳しい要旨付きで紹介される。講演会もしばしば主催しており、とくに意義深い講演の速記は「学習院輔仁会雑誌」に掲載される。そうした活動の中に、三島のいう「貴族的なるもの」と発想を近くする内容を見出しうるのである。

昭和十三年五月七日、文芸部弁論部創立五十周年記念講演会が開催され、犬養健・三宅正太郎・児島喜久雄・武者小路実篤の四人が講演を行った。午後七時開演、十時四十分閉会となつたのち場所をあらためて茶話会があり、散会は十一時過ぎになつた。各家庭に招待状が配布され、来聴者は約百二十名を数えたという。

このとき、児島喜久雄は「僕の夢」と題する講演を行った。速記が「学習院輔仁会雑誌」一六二号（昭二三・六）に掲載されている。明治三十一年に初等科五年に編入、当時六年制だった中等科を明治三十九年に卒業したのち一高へ進学した児島は、現役の学生に向かつて次のように期待を寄せる。

日本の貴族は、「中略」古い御公卿様とか或は大名といふやうな古来の長いトラディションを持つた貴族の家が大部分であります。「中略」さういふ方々は長い間詰り日本の國を背負つて立つた祖先の偉い人達の末裔であります。長い間日本の文明の中心を形づくつて居た名家の跡を承けて居られる訳です。だから万一諸君にさういふ資格が

十分になかつたとしても、必ず非常な優れたトラディションだけは持ち伝へて居られて、自分では知らなくつても、長い間に培はれた品格も高尚な趣味も持つて居られるに違ひないしそれから非常に良い各種の素質も持つて居られる筈であります。古来の長いトラジションを持つた大名の家とか公爵の家柄には中々一朝一夕には出来ない尊いものが沢山遺傳的に伝はつて居るのであります。それが無くなるのは非常に惜しい。「中略」生きた人間が尊い伝統を背負つて居る「中略」だからそれは非常に値打のあるものであります。それはますます「発展させていかなければならないものであります。

貴族の子弟として学習院学生に課せられた使命と期待をうかがうことができる。これが「学習院輔仁会雑誌」に掲載されることによつて、学生の自覚を促す意味を担つたにちがいない。

一方、各号の「弁論部報告」欄に掲載された学生の演説要旨からは、こうした期待に呼応するように「学習院精神」といった言葉が頻出する。学生にもこうした使命と期待に応えようとする意識は認められるのだが、こうした主張は、使命感が欠如した一般学生への批判の形を取るため、即座に学習院全体の雰囲気と見なすことはむずかしい。それでも、時局の推移にともなつてその主張が深化するさまを確認できる。

「学習院輔仁会雑誌」一六六号(昭一五・一一)「弁論部報告」欄には、昭和十五年六月二十五日に行われた中等科春季弁論大会の様子が掲載されている。

八、反省 五年 徳大寺純明 七分^①

彼の振起大会の成果は如何。学習院の伝統であるか、腕力のある者が中等科を統治する習慣が今迄続いて来てゐる。而もそれが独裁的な傾向を帯びてゐる。吾々は此の伝統に對して批判の眼を向ける必要があるであらう。苟も中等科をより良きものに為すために唯腕力のある者のみか中等科全部を掌握して行つては決してうまくゆくのではない。腕力より徳の力がどれだけ善なるものに向はしめるに益あるものか量り知れない。和かな気分につつまる学園たらしむるには徳の力を以てして始めて効あるものである。我々は是非とも無氣力を打破しなくてはならぬ。上級下級が一致した時に始めて中等科は始められるものだ。和合一致して行かなければならない。学校から指定されてゐる自治員がもつとく活躍すべきだ。自治員は飽くまで、難局を押し切つて中等科改善に努むべきであると強調、熱弁を振はれ、手に汗を握る心地がする。君の始めての投壇、そして気魄がある。弁論部の期待する論題であつた。今後之を機会に弁論部の為大いに活躍されんことを切に望みます。

「振起大会」がどういふものか判然としないが、その大会を通じて、徳大寺は学生の間に蔓延した「無氣力」の源に思い当たり、「中等科改善」に立ち上るべきと主張している。この欄を執筆した弁論部委員もその「気魄」に賛辞を惜しまず、「弁論部の期待する論題」と述べる。この「期待する論題」は、昭

和十六年六月十七日に開催された春季高中合同弁論大会の模様を掲載した「学習院輔仁會雜誌」一六七号(昭一六・一二)の同欄においてさらに具体化する。

七、所感 文一 森 欣一(十分)

振氣大会を契機として学習院の再建が叫ばれて来た。学習院は現在の儘では、其の特殊性を持たない。学生は「お坊ちゃん」でよいといふ諦めを持つてはならない。「お坊ちゃん」の夢に陶醉することは院の一般的水準を下げることになる。院の再建は、運動文化の両方面に於て強調せらるべきである。運動部の不振は明かであるが文化部の沈滞は著しく、弁論部に於て特に然りである。こゝでいふ沈滞とは関心の問題である。現在は文化部に対する関心が全く見られない。運動部の人が文化部に無関心なのは、運動部、文化部の融合を計るべき雰囲気欠助に依る。学業を軽んじて運動する人は、運動を冒瀆する者である。簡単な実践主義から、運動することを実践であると考へ、学問に懐疑的になるのは、学問に対する逃避である。然し運動は、書物の中から汲取られない教訓を与へるから俱に疎にすべきではない。文化部、運動部を媒介として、学習院を偉大にする為には、お互に、不便を忍ばねばならぬ、先づ我々は世界的新秩序を認識し、学習院の中に自己を捧げ、正しいと信ずる事に対して情熱を以て進むべきである。運動部員としての君が、文化部に対しての理解を示した。一般運動部員の反省を促したい。熱のあることは賞すべきである。

が、原稿に幾分頼りすぎた。今後、話術の練習に努力され、ば、君の弁論術は、一段と飛躍するであらう。院の再建を論ずるに當つて貴族の精神に就いても一言して欲しい。

ここでもまた「振氣大会」が取り上げられる。これが徳大寺のいう「振起大会」と同じものか判然としないが、振氣大会を契機に文化部の衰退に思い当たり、その発展こそが学習院の再建に通じると説く点は徳大寺に近く、「弁論部の期待する論題」といえるだろう。ただし、学習院の「特殊性」について言及した点が同学年の徳大寺より一步踏み込んでいる。その「特殊性」が貴族子弟の多く通う学習院の性質に由来することは「僕の夢」に見るとおりだが、弁論部委員はその点をとらえて「貴族の精神に就いても一言してほしい」と述べる。学習院の特徴を「特殊性」ととらえるだけではなく、それを「貴族」の子弟の使命感に結びつけることで、主張を深めようとする意図が感じられる。

実は、この「貴族の精神」の主張は同じ大会の上級生登壇者の演説に見ることができる。

十、学窓雜感 ○文三 矢吹彰男(五分)

学習院の存在性を認識し、実行するのが、我々の眞の学生生活である。学習院は血統を使命とする貴族の学校である。我々は学習院の存在を主張しても、其れに足るだけの事をしていないだらうか。動もすれば上から型にはまり過ぎた教育を学生に当嵌めるのは残念である。君の主張は尤も

であるが、では如何なる教育を我々が欲して居るかを究明して頂きたい。熱と声量も豊富であり、君の学生々活から割出した信念が溢れて居る。

十一、所感 ○文三 坊城俊久(七分)

学習院の伝統は貴族の精神であり、此の精神は上流社会に隠れて居る。此の精神を体得しないから院に対する批判が起る。貴族の精神には、純情と、正義と、助気が必要である。我々は社会に行はれて居る邪悪を排除し、正義を貫徹せねばならず、其れには勇氣が必要である。我々は飽く迄も社会の悪風潮に誘惑されてはならぬ。貴族は、皇室に忠誠、万民の儀表でならなければならない。我々の學問は自分のみに留らず、他人に幸福を与へるものでなければならぬ。此の奉仕的精神が必要である。学習院の沈滞は、貴族的精神の自覚の欠助に依る。貴族的精神を自覚し、其中に学ぶべきである。学習院の再建が叫ばれて居る時、其の核心となるべき貴族的精神に対する君の信念に敬服する。更に一層の熱と声量を以て望まれたならば、聴衆により多き感銘を与へたであらう。

両者とも、学習院の特質を「貴族の学校」である点に求め、血統の中に隠された「貴族の精神」を学習院学生のアイデンティティとして確立しようとする提言である点、執筆者の手際かもしれないが共通する趣旨の演説である。状況面をみると、矢吹と坊城がともに最上級生で、しかも初登壇であったこと

に、「学習院の再建」に関する学内の高揚感をうかがうことができる。最上級生であることは、大学進学を控えた多忙な時期を押しての発言を意味し、初登壇である点に、学内全般の状況をふまえてのやむにやまれぬ発言であったことを読みとれる。そして、彼らに対する委員の賛辞をみると、徳大寺や森の演説に対する委員のコメントには、振気(振起)大会をきつかけとして芽生えた「学習院の再建」に関する機運を、上級生の演説と接続させることによって「貴族の精神」への考究に導こうとする意図が感じられる。「貴族の精神」は、沈滞した学内の状況に対する危機感から、とくにこの時期の学習院内で論じられたテーマだつたのではないだろうか。

こうしてみると、「花ざかりの森」に関して三島が東に語つた「貴族的なるもの」の復古とそのあり方¹²⁾という主張も、こうした学習院内の議論を反映したものと考えることができる。「貴族の精神」が「血統を使命とする貴族の学校」に籍を置く学生の裡に「隠れて居る」と同様な性質をもたせるため「花ざかりの森」における「わたし」の「憧れ」も「内発的な超自然的な」ものとして設定されたのである。もし三島の当初の目論見どおり「花ざかりの森」が「学習院輔仁会雑誌」一六七号に掲載されていたとしても、やはり違和感なく誌面に収まっていたことだろう。

4

ところで、この弁論大会でもっとも鮮明に「貴族の精神」を

論じた坊城俊久は文芸部に所属し、かつて文芸部委員を務めていた。これを考えると、この議論に三島が「花ざかりの森」で参加することには、文芸部委員の立場上の必然性があつた可能性がある。そこで、文芸部の状況を検証したい。

ふたたび東文彦宛書簡から確認する。「花ざかりの森」連載中の十一月十六日付書簡で、三島は「輔仁会雑誌はまだ出来ません。じれつたくて投げ出したくありません。文芸部はもう沢山です。『中略』潮気のやうなものはどこにあるのでせう。」と恐痴をこぼし、「僕が浪漫派を好きになりかゝつたのは、そんな反動でせう。」と述べている。文芸部の雰囲気が低調であることへのいらだちがにじむ。このいらだちの原因は何だろう。

東宛書簡をみると、昭和十六年前半に三島は文芸部内の路線対立に直面していた様子がうかがわれる。東は喉頭結核のためにながらく休学しており、文芸部に関する愚痴を語る相手として好都合だったのだろう。文面には三島のいらだちが頻出する。一月十四日付け書簡を引用する。

来週の木曜には合評会があります。おほかた貴方はいらつしやれますまいが、本当に来て頂けたら……と思ひます。どんな方が見えるか知りませんが、おそらくつまらぬ会になるのではないかと心配してをります。

「合評会」とは、三島が小説「彩絵硝子」を発表した「学習院輔仁会雑誌」第二六六号（昭一五・一一）のもので、三島は一月二十六日付書簡でその様子を次のように語っている。

扱て、合評会は驚くべき痴呆的な会合でした。会議室大テブルの左右には、高一の俳句派と、高二との二派が相対し、下座に、私と「郁郎」さんと鍋島といふ人が並び、上座に豊川さんと、終始この会を牛耳つた某氏がすわられました。「中略」輔仁会雑誌は今年から年一回になり、「十月」ごろ発行する予定らしいです。この十月が問題で、俳句側勝つか、反対派勝つかハツケ、ヨイヤです。前者が勝てば、俳句の驚くべき進出はおそらく免れますまいし、俳句派に雑誌を占領されることにもなるわけです。

ここには文芸部の路線対立に対する三島のいらだちが読みとれる。文芸部内に「俳句派」と三島が呼ぶ一派があり、かれらがイニシアチブをとれば「学習院輔仁会雑誌」における俳句の比率が向上し、小説が削減される可能性を三島は危惧している。中等科唯一の文芸部委員として「学習院輔仁会雑誌」の編集に携わっていた三島にとって、対立の帰趨は三島自身の立場に影を落とし、小説の発表も危ぶまれかねない。先述の枚数規定を考えあわせたとき、それは「花ざかりの森」の構想と発表とに影響を与える可能性があつた。

だが、実際の「学習院輔仁会雑誌」一六七号の誌面は、二十八ページから三十一ページにかけて八名、四十首の俳句が掲載されるのみで、「驚くべき進出」という状況にはほど遠い。それに三島自身の力も預かつていたことは、六月十五日付け書簡に、

—明日(十六日)には新委員を決めます。結局、新らしくはいつてきた高一の四、五人の部員のなかからとるので、僕としてはなるだけ僕の思ふとほりになる人がい、と思ひます。ろくに知らないくせに専権をふるはれると困りますから。又、さ来年は年の功でその人が委員長になるのですから。その人が思ふとほりやられては、いつになつても僕の浮ぶ瀬がありませんから。この利己主義をお笑い下さい。

とあることになうかがわれる。

この状況をどのように考えればよいだろうか。まず、「学習院輔仁会雑誌」という発表機関の死守が三島にとつて重大事であつたことは想像に難くない。太平洋戦争を目前に控え、小説発表の機会が減少することは明らかである。発表機関の確保のために、弁論大会の報告に見る学内の議論に應じる必要があつたではないか。その際、俳句というジャンルは「貴族的なるもの」を表現するには不適當であらう。俳句派が誌面を牛耳れば、学習院学生の間で論じられた「貴族的なるもの」の議論に創作を通じて参入する機会は創作欄から失われる。

次に、この派閥が学年別の構造として三島にとらえられている点も「花ざかりの森」と学習院内の議論との接続を想像させる。高一の「俳句派」に対して、同じ高一で三島の「思ふとほりになる人」たちもいることに三島は期待を寄せるが、彼らは前述弁論大会の徳大寺や森と同学年である。三島は文芸部の一

方面の代表として、学習院内に広がった「貴族的なるもの」の議論に加わるべく「花ざかりの森」を構想した可能性は高まる。こうした学習院内の動搖の痕跡を留める「学習院輔仁会雑誌」一六七号に、三島は「編集後記」を記している。

近ごろの風潮に便乗するわけではないが輔仁会雑誌と文芸部との衰退は取りも直さず古典の枯渇だと考へてゐる。学習院のルネッサンスといふものが叫ばれるならよろしく古典から出発すべきであるし又古典の復活といふ点で学習院ほど格好な温床も少なからうと思ふ。藤原鎌足以来の血に生きてをられる諸君の内からこそ古典復興の旗が掲げらるべきであらう。徒なアメリカニズムに酔ふことは最近の本院の隠し難い病患でなかつたかどうか。爾来古典の礼賛は極端な楽天主義に陥つたりやたらなヒロイズムに奔つたりするきらひがないではなかつたが、今にち時勢の流れと現実の切迫とをよく噛みしめた上でこそ古典に対する批判もかやうな弊から遁れ得るのだし又かへつて古典の吟味が今にちの身のあり方に至高の道標を与へるのではないかと思ふ。彼此関連して古典復活にもつとも適切な機会が見つかり出されつゝ、あるやうに思はれる。

「藤原鎌足以来の血に生きてをられる諸君」の限定から、「学習院のルネッサンス」が弁論大会にみる「貴族の精神」と同じ「風潮」を指すことは明らかである。「輔仁会雑誌と文芸部との衰退」の問題視も「弁論部報告」欄にみる学習院の状況や再

建の声と重なる。さらには、三島が「アメリカニズム」に学習院の「病患」の原因を見、その処方として「古典復興」を訴える点は、前述の坊城の演説内容を一歩進め、「武家と公家の祖先」の設定とそれへの「憧れ」という「花ざかりの森」のモチーフを評論の形式で語つたものとみることが出来る。「花ざかりの森」における「貴族的なるもの」のモチーフは、学習院再建に関する学生の声に対する三島の見解の小説化であった。

しかし、前述のようにこれは「文芸文化」にとつても非常に好ましいモチーフであった。そのため「文芸文化」との「縁」を生じ、「花ざかりの森」は掲載にいたつたのである。さきに「花ざかりの森」と「文芸文化」との「縁」とは保田與重郎を仲立ちとした同時代的共振であると述べたが、「花ざかりの森」執筆の「貴族的なるもの」の主張もまた、「学習院輔仁会雑誌」と「文芸文化」の両者に通じる同時代的共振であつたといふことができる。「花ざかりの森」をめぐる〈場〉は、「文芸文化」や保田與重郎の代表する文学状況であると同時に、一学生を取り巻く環境でもあつた。しかし後年の三島は、こうした背景を語らず、日本浪漫派との接点を強調したのである。

さて、本論で筆者は週及的な三島の自己言及によるバイアスを指摘しつつ、同時代的な〈場〉の検証から「花ざかりの森」の成立背景を論じた。テキスト解釈においては最終的にさまざまに読み方が許容されるにせよ、ひとまずは作品がうまれた〈場〉における作品の意味を解明する態度が必要となるだろう。その際、これを隠蔽する状況があるならば、調査と考察によつて注意深く取り除き、隠されたものを明らかにしなければならぬ。

ばならない。たとえその隠蔽工作が作者自身によつて為されたものであつたとしても。「三島が語つた三島」ばかりに依拠するのではなく、困難ではあつても「三島が語らない三島」を論じることが、今日の三島研究に求められている方向性ではないだろうか。

注

- (1) 響庭孝男「三島由紀夫と日本浪漫派」(昭五・一・二)「国文学解釈と鑑賞」
- (2) 小高根二郎「伊東節雄と日本浪漫派」(昭三・三・八)「バルカノン」、塚本康彦「雑誌『文芸文化』」(昭四・一・二)「日本浪漫派研究」など。
- (3) 「三島由紀夫伝説」(平五・二)新潮社
- (4) この点については杉山「炎の幻影」にみる三島由紀夫——初期三島成立の〈場〉に関する一考察(平一五・三)「昭和文学研究」で論じた。
- (5) 「心のかゞやき」「公園前」「鳥瞰図」「屋敷」「ミラノ或ひはルツェルンの物語」「花の性および石のさか」の六編、すべて生前未発表の小説。「三島由紀夫初期未発表小説における〈貴族階級〉——心のかゞやき」「公園前」「鳥瞰図」の二側面(平一八・一)「京都語文」で一部を論じた。
- (6) 「決定版三島由紀夫全集」第三八巻(平二六・三)新潮社。以下本論における番簡の引用はこれによる。
- (7) 筆者は、三島が消水から古典文学に関する手ほどきをうけ、精神的な結びつきを深めたのは「花ざかりの森」編纂以後のことだつたと考えている。
- (8) 三島文学館所蔵の原稿「花ざかりの森」その三(上)による。これは現行「花ざかりの森」の「その三(上)」「その三(下)」とストーリー

はほぼ同じで、本論に引用した八月九日東宛番簡による三島の説明どおりである。

(9) 進田は「エンと訓んでも、ゆかり・えにし・ちなみと訓んでもいい」とする。

(10) 清水「河の音」(昭四二・三 私家版)

(11) 漢数字の番号は登録の順序、学年に○が付されているものは初登録を表す。

(12) 昭和十八年六月十三日付け東宛番簡にも「学生たちの間には学習院改革熱にうかされるもの多く、この水えうにも学習院問題弁論大会(振気大会)のやうなものが催されます。」とある。

(すぎやま きんや 筑波大学非常勤講師)